

母親の語りに見られる地域差 (3)

・ 東京と山形の発話構成の比較 ・

文京学院大学 上村佳世子
日本獣医畜産大学 柿沼美紀

Telling Stories as a Joint Activity

・ How Tokyo and Yamagata mothers organize the activity ・

Bunkyo Gakuin University UEMURA, Kayoko
Nippon Veterinary and Animal Science University KAKINUMA, Miki

母子が共同でつくる話りのスタイルの地域差を検討した。対立的な人間関係を暗示する線画について、母子の言及の内容項目および提示のしかたに違いがみられた。話りの構成としては、東京の母親は画面の状態を他者との関係に原因を帰属させ、並列的に他の可能性が提示して子どもに選択させるというスタイルをとる傾向が示された。山形の母子は対立的な状況に関する言及はみられたが、状況を対人的な要因に帰属させることも、それを暗示する小物に言及する比率も少なかった。これまでに沖縄、東京、山形の話りのスタイルを比較検討してきた結果（柿沼・上村 2003）このようなスタイルの違いは、それぞれの生活地域に適応するための人間関係の解釈や対処方略を表しており、母親は適応的なモデル提示し、子どもはその共同行為に参加することでそれを獲得していくものと考えられる。特に人の流動性の高さがこの違いと関連していると思われる。

【キー・ワード】話りのスタイル、地域差、共同行為、東京、山形

Story telling style of Yamagata mothers and Tokyo mothers are compared. The analysis was focused on how they discuss interpersonal conflicts shown in the picture. The main feature of the picture, that is the conflict, is mentioned, in both areas, but while Tokyo mothers tend to mention the possible cause for the conflict, Yamagata mothers seemed to have avoided doing so. Tokyo mothers 1) attribute the situation drawn in the picture as the cause of the conflict, 2) present several possibilities and, 3) allow the child to select likely ones. Yamagata mother-child pairs discussed about the conflict, often times without mentioning the possible cause.

We have been comparing Okinawa, Yamagata and Tokyo story telling activity (Kakinuma & Uemura 2003), and have reported some differences in the style, indicating that these differences are of the reflection of the interpersonal relationship of the particular society, and that mothers tend to reflect the narrative style and the child acquire the style by participating in such joint activity. We speculate that these differences may be related to the mobility level of the society

for generations.

【Key Words】 Story telling styles, Sub-culture differences, Japan

はじめに

人間が他者の行為を理解した予測したりする際に、状況的文脈に関する情報を利用しようとする。その際には、いくつかの情報を読み合わせて解釈したり判断したりしている。しかし、東(2002)によれば、状況を判断するために必要と考えられる情報の種類は人によって異なり、また情報が欠けている場合には、与えられた情報を時系列的に並べたり意味的に解釈したりしながら、主体がその行為をひとつの物語のなかで位置づけながら判断をおこなっている。この時に、われわれは自分の認知的枠組を基準として、行為や文脈を理解していく。認知的枠組は、個人の生活経験のなかで構成・再構成され、判断に使用される文化的道具(cultural tool)となる(Wertsch, 1991)。それぞれの生活経験に照らして適応的に形成されていくところに、文化差が生まれると考えられる。

異なる地域の母子の語りのスタイルの違いを比較した研究(例えば、Wakabayashi, Fernald & Kakinuma, 1999; 柿沼, 2001)では、線画を提示して自由に語ってもらうという手順をとっており、かなり限られた情報から文脈を読みとることになる。母子の語りのスタイルには日本とアメリカ(Wakabayashi ほか, 1999)、国内の地域(柿沼, 1999; 柿沼・上村, 2001; 2003)で、違いが示された。そこには、それぞれの文化的環境に適応する上で必要となる情報が含まれると同時に、こうした母親との共同行為に参加することによって、子どもは語りのスタイルを身につけていくことが予測される。

本研究では、それぞれの地域の発話のスタイルがどのように構成されるか、また、人間関係における対立的な側面がどのように言及されるかを明らかにすることを目的とした。具体的には、対人的な問題、その原因の帰属および解決がどの程度の頻度で言及され、それはおもに母子のいずれによって言及されるかを検討した。さらに、母子が共同でどのような情報をどのような順序やスタイルで提示されるのか、幼児期にある子どもが、発話スタイルの構成にどのくらい貢献できるのかを、両地域を代表する2組の母子の語り内容を分析することにより検討した。

方 法

被験者： 東京、山形の3歳から5歳の子どもと母親、それぞれ16組を対象とした。

課 題： Wakabayashiら(1999)が用いた課題を使用し、柿沼(2001)、柿沼・上村(2001; 2003)と同様の手順で実施した。4枚の絵は子どもの絵本を参考に作成した。そのうちの2枚(図1、図2)について分析をおこなった。課題は自宅、友人宅、保育所など子どもが日常的に慣れている場面を実施し、山形では市内に在住の女性に方言で教示してもらい、母親に絵を用いて子どもに話をするようにと指示し、その様子を映像と音声で記録した。

言及項目の検討： 発話を以下の分類でコーディングをおこなった。図1については、「泣いている



図1 「折れた棒」場面の線画



図2 「砂浜」場面の線画

子」、「棒」への言及があるかどうか、泣いている原因を「他者との関係」(こちらに背を向けている子と喧嘩をした、叩かれた、など)および「自己内の要因」(お腹が痛い、転んだ、など)に帰属させるか、さらに「感情表現」(悲しい、痛い、など)を使用するかどうかの5項目を検討した。図2については、「ひとりで遊ぶ子」(魚をつくっている、ひとりぼっちでいる、など)、「ひとりいる原因」、「問題の解決(入れてと言う、一緒に遊ぼうと呼ぶ、など)」、「感情表現」(かわいそう、寂しい、など)の4項目について、それぞれの地域の16組の対象者のうちで言及する比率を調べた。上記のそれぞれの項目については、母、子のいずれが先に具体的に言及するかをカウントした。

結 果

言及項目の内容： 「折れた棒」場面については図3に示されるように、「泣いている子」にはいずれも地域の母子も言及しており ($\chi^2(1)=1.03, n.s.$)、この線画に関する語りの基本的な内容になっ

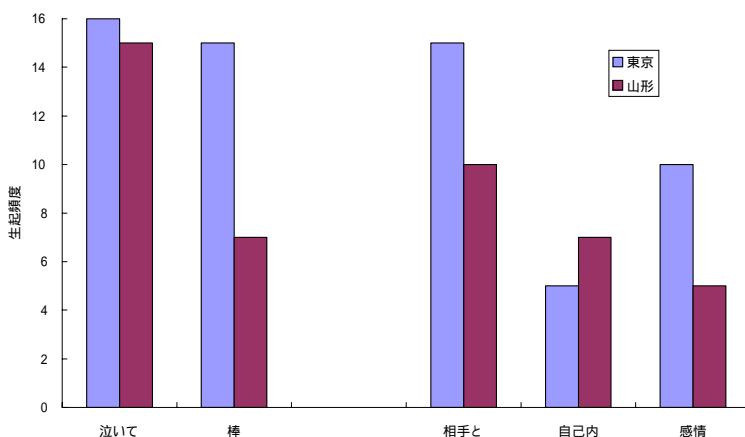


図3 「折れた棒」場面における言及内容

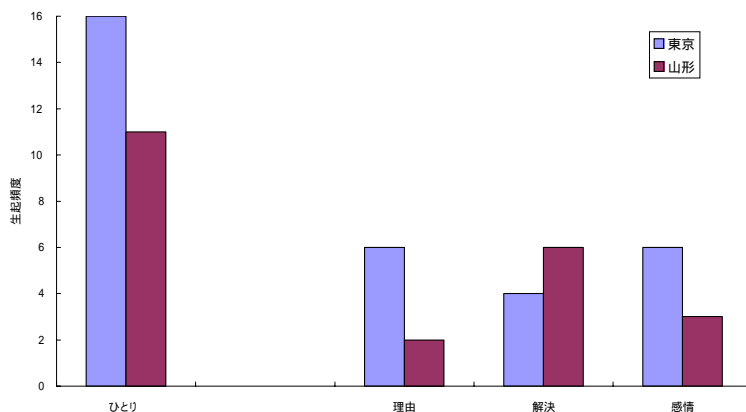


図4 「砂浜」場面における言及内容

ていたことがわかる。しかし、同様に画面に描かれている「棒」については、東京でほとんどの対象者が言及していたが山形では7組でしか言及されず、有意な差が示された ($\chi^2(1)=9.31, p<.01$)。泣いている理由については、東京では「他者との対立的関係」に帰属することがほとんどであるが、山形では10組のみであった ($\chi^2(1)=4.57, p<.05$)。他方、泣いている「対象の内的要因」に帰属することは、両地域で差が示されなかった ($\chi^2(1)=.53, n.s.$)。語りのなかで「感情的表現」を使用したのは、山形よりも東京の母子のほうが多い傾向が示された ($\chi^2(1)=3.14, p<.10$)。

「砂浜」場面については図4に示されるように、東京ではすべての母子で「ひとりで遊ぶ子」へ言及していたが、山形では11組しか触れなかった ($\chi^2(1)=4.57, p<.05$)。ひとりでいることの「理由」についての言及についても ($\chi^2(1)=2.67, n.s.$)、ひとりでいることの「解決」の言及 ($\chi^2(1)=.58, n.s.$) および「感情的表現」の使用 ($\chi^2(1)=1.39, n.s.$) についても、有意な差は示されなかった。しかし、山形の言及項目の比率を詳細にみると、ひとりで遊んでいる「理由」については2組の母子しか言及していないにもかかわらず、6組もがその「解決」について何らかの言及をしていた。

項目の言及者の同定：「折れた棒」場面について、各内容項目を母子のいずれかが最初に言及したかを示したのが図5である。東京では「泣いている子」、「泣いている理由(他者関係,自己内要因)」に最初に言及したのは母親である傾向がやや高く、「棒」は子どもによって先に述べられる傾向がみられた。山形では、「泣いている子」への言及はおもに母親から出ており、「棒」についての7件の発話はすべて母親から最初に出ていた。逆に、「泣いている理由」については子どもが最初に述べるが多かった。

「砂場」場面については、図6に示されるように両地域ともに「ひとりで遊ぶ子」は、最初に母親によって述べられた。「ひとりでいることの解決」への言及頻度は全体として高くないが、やはり母親によって述べられるが多かった。「ひとりで遊ぶ理由」の言及頻度も高くないが、山形で理由が述べられた2組ともに、最初に述べられたのは子どもの側からであった。

母親の語りに見られる地域差（3）

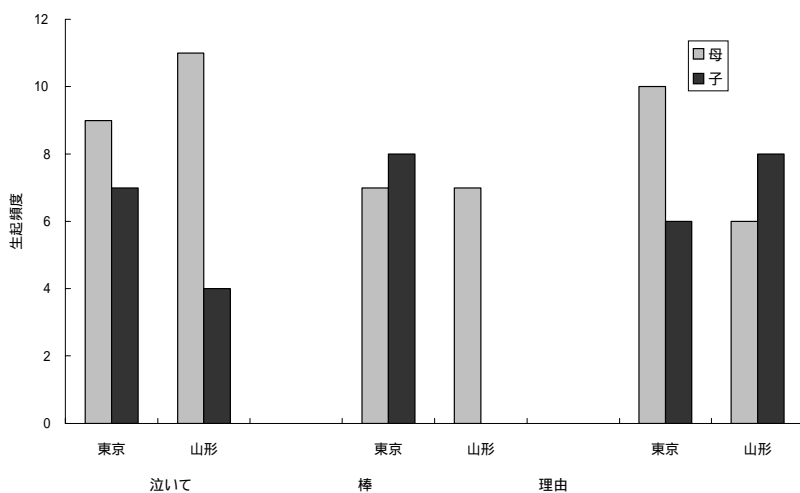


図5 「折れた棒」場面における最初の言及

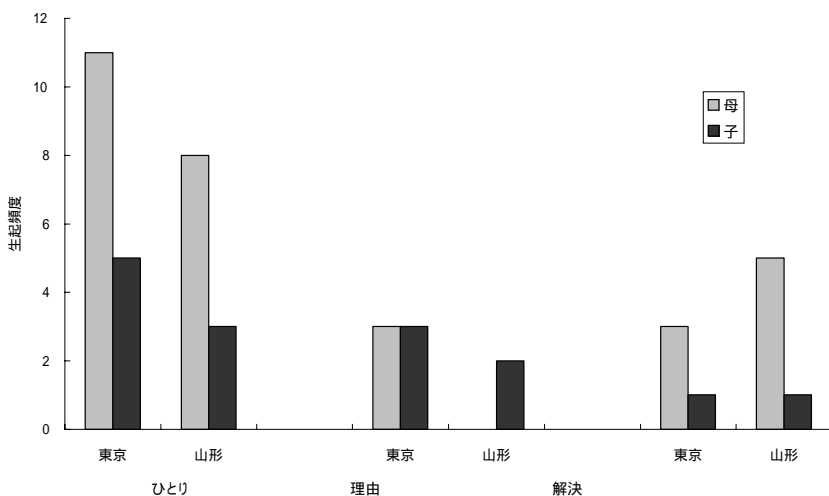


図6 「砂浜」場面における最初の言及

語りスタイルの地域差： 母子が共同で構成する語りスタイルを東京と山形で比較するために、言及内容の項目がそれぞれの地域特性を表していると考えられる2組ずつを選択し、「折れた棒」場面についての語りの内容項目の提示順序および母子の発話内容を構成のしかたを検討した。

まず、両地域の共通点としては、会話の泣かれは親がつくっており、子どもの発話を動機づけようと働きかけていることが挙げられる。共同で構成される語りとしては、「泣いている」や「棒」などの描かれている内容の直接的、状況の説明から開始して、次にそこでの問題およびその原因の言及や

それに伴う感情表現が提示され、問題の解決や「 だったら」というような自己の投影への言及は、中間より後の部分に提示されるといったおおよその構成が示された。

東京の事例(事例1参照)では、JK-1は子ども(9)、JK-7は母親(15)によって棒に触れられており、さらに、「どうしたのか」、「何をしているか」など、母親の質問(6, 8)が子どもの発言を引き出すのに有効に機能していた(7, 9)。ここでは、「泣いている理由」を他者との対立的な関係に帰属した(7, 17)ばかりでなく、泣いている子自身の内的要因についても母親が付加的に言及して(12, 19)、子どもが自

事例1 東京の母子の「折れた棒」場面の語り

<p>東京 JK-1</p> <p>1 C: 泣いている。〔泣いて〕</p> <p>2 M: これはどうしたんでしょうね?</p> <p>3 C: 泣いている。</p> <p>4 M: 泣いているね。</p> <p>5 C: この子が xxx</p> <p>6 M: この子が何をしたんだろうね?</p> <p>7 C: うん、叩いたの。〔原因・他者〕</p> <p>8 M: 叩いたのかな。これ何だろう?</p> <p>9 C: 木。〔棒〕</p> <p>10 M: 木かな、あ、木か。あ、棒で叩いたのかな。</p> <p>11 C: そうかも。</p> <p>12 M: そうかなあ。でも、わからないよ。</p> <p>この子が大事にしてた棒を折っちゃったたけなのかも。そうでなくてどうだろうな。この子が泣いてるんで、この子が助けに来たのかも知れない、どうしたのって。どうして泣いてるのって来たのかも。〔原因・内的〕</p> <p><省略></p>	<p>東京 JK-7</p> <p>13 M 何で泣いてると思う?〔泣いて〕</p> <p>14 C わかんない。</p> <p>15 M わかんないね。これ何かな、木の枝かな。〔棒〕</p> <p>16 C 木が折れてる。</p> <p>17 M 木が折れてるの。じゃ、もしかして、ぶたれちゃったとか、そういうことかな、喧嘩かな。〔原因・他者〕</p> <p>18 C 喧嘩。</p> <p>19 M それとも、これが欲しかったから泣いているとか、そういうことかな。</p> <p>〔原因・内的〕</p> <p><中略></p> <p>20 C うん、この枝が欲しくて、この子が xxx ってたから、泣いちゃった。</p> <p>21 M あ、悲しくてないちゃったね。〔感情〕</p> <p><中略></p> <p>22 C うん。</p> <p>23 M どうすれば仲直りする?〔解決〕</p> <p><省略></p>
---	--

語り内容の流れ

JK-1 C 泣いて M どうしたの? / C この子 / M 何をしたの? / C 叩いた M これは何? / C 木 M 棒で叩いた or 棒を折っただけ or 泣いてるから助けに来た

JK7: M 何で泣いて? / M 木の枝 C 木が折れて M 喧嘩 or 欲しくて C 喧嘩

M 悲しくて / M どう仲直り? C 木をあげる

ら考えて提示された複数の選択肢から選ぶという形で原因について言及するというスタイルが特徴的に示された。この2組の語りスタイルに共通していたのは、まず「泣いている」ことに言及し、次に母親に導かれて画面に描かれている「棒」と、これは画面には示されていない「泣いている原因」に焦点を移している。ここで「原因」を複数提示して、子どもに考えさせ選択させるのは東京の母子の特徴とみられた。JK-7では、その後で「泣いている子の感情」と「問題の解決」に触れられていたが、JK-1はこの部分については語られなかった。

山形の事例(事例2参照)では、2組ともに「泣いている理由」は子どもによって述べられた。JKY-6では、原因を他者との対立的関係に帰属し、感情的状態についても述べられていた(25)。JKY-2では、原因を泣いている子の内的要因に帰属しており(38)、画面に直接的に描かれている「棒」についてはまったく言及されなかった。また、いずれの組も、母親によってもうひとりの子に「解決」の役割が与えられた(35, 41)。山形のこの2組に共通していたのは、最初に「泣いている」ことが述べられ、

事例2 山形の母子の「折れた棒」場面の語り

山形 JKY-6	山形 JKY-2
24 M どうして泣いてるかな?〔泣いて〕	36 C これ泣いてる顔。〔泣いて〕
25 C 喧嘩して寂しいから。〔原因・他者〕〔感情〕	37 M ん、何して泣いたの?
26 M 寂しいから?	28 C 腹痛くて。〔原因・内的〕
27 C うん。	28 M 腹痛くて泣いてんの、そうか。Xxx ね。
28 M これ、何これ?〔棒〕	こっちの子は?
29 C ん、これ?	40 C xxx
30 M うん。	41 M どうしたのって言ってんのか。〔解決〕
31 C うんとね、ここちよびぶつけた。	
32 M ぶつけたって泣いたんだ。	
<中略>	
33 M ふうん、かわいそうだね。	
34 C うん。	
35 M ね、でも、お母さんは、お兄ちゃん、なく	
さめに来たと思うよ、どうしたのって。	
〔解決〕	
<省略>	

語り内容の流れ

JKY-6: M 泣いて M どうして? / C 喧嘩して寂しい M これ何? / C ぶつかった

M この子は? / C 投げた M かわいそう / M なくさめに来た

JKY-2: C 泣いて M 何をして? / C 腹痛くて M この子は? / M どうしたのって言って?

原因が母親の誘導で子どもによって語られ、最後に母親が「問題の解決者」として画面に描かれているもうひとりの子どもに触れていた。JKY-6の子どもは「原因」を他者関係と「子どもの感情」に帰属させていおり、「棒」については後で触れられた。JKY-2では、「原因」が内的要因に帰属されたため、次には画面に描かれた「もうひとりの子ども」に焦点があてられた。

考 察

本研究では、東京と山形の母子の語りのスタイルの違いを明らかにするために、対立を暗示する人間関係を含む2枚の線画を提示して、母子が語りのなかでどのような情報をどのような順序で言及していくのかを検討した。

「折れた棒」場面の母子の語りについて、画面の中心的な題材となる「泣いている子」は、両地域の母子のほとんどが言及しており、とくに山形では母親によって述べられる傾向がみられた。「泣いている理由」については、東京では母親により、もしくは母親主導で子どもによって提示されていた。そのほとんどが画面でこちらに背を向けている他者との関係に原因帰属しており、これに泣いている子の内的要因の可能性などが母親によって並列的に提示され、子どもに複数の視点から考えて選択できるように情報を与えるというスタイルがとられていた。他方、山形では対立的な他者との関係に帰属することは東京よりも少なく、原因は子どもによって述べられる傾向があった。

地域差でもっとも特徴的であったのは、「折れた棒」についての言及であった。棒は画面の右下に描かれており、対立的関係の可能性をかなり明確に暗示する要因と考えられるが、東京の母子のほとんどが言及しているのに対して、山形では半数以上の母子がこれに触れなく、触れたケースについては棒への言及はすべて母親によるものであった。母子が「泣いている原因」を他者との関係に帰属することが少なかった事実と考え合わせると、山形では対立的な人間関係やその原因を明言する傾向が少ないことがわかる。同じ線画の語りの日中比較研究(柿沼・上村・静・金・黛, 2004)では、「棒」への言及率が内モンゴルや沖縄よりも都市部(広州, 東京)で高く、本研究の結果の東京と山形の言及率の差をみると、やはり地域社会の流動性・多様性がその要因の一端にあることが予測される。

感情的表現の使用は他の項目と比較すると高くはないが、全体的に山形より東京の親子に多い傾向があり、これも東京と沖縄の地域差の比較(柿沼・上村, 2001)と類似した結果が得られたと言える。また、問題の解決については全体的に最後に述べられることが多く、原因を背を向けた子との対人関係に帰属された場合には「謝罪」や「和解」が語られ、内的要因に帰属させた場合には背を向けた子には「慰めに来た」もしくは「助けに来た」という役割が与えられる傾向がみられた。

「砂場」場面については、「ひとりの子が集団の輪から離れていること」にのみ焦点をあてて語り分析された。その結果、「ひとりで遊ぶ子」については東京よりも山形の母子の言及率が低く、その「理由」についての言及はごくわずかであった。この場面では「折れた棒」のように対立的な人間関係を明確に暗示するものがないものの、この言及率の低さは対立的な人間関係を明言しないという先の結果と同様の傾向を表しているものと考えられる。山形に多く見られた「ひとりで遊ぶ」という事態の理由がほとんど語られないにもかかわらず、その「解決」についてはわずかながら多くの組

が触れていたことは特徴的であった。

このような語りのスタイルの地域差の背景として、それぞれの生活環境において接する人間関係の特性が考えられる。すなわち、東京の地域で生活するためには、よく知った人間関係と見知らぬ他者との一時的関係のいずれにも対処しなければならず、あらかじめ複数の状況判断や他者の行動の可能性を準備し、周囲の状況の情報から自他の行動の因果関係を明確化し、他者の気持ちへの配慮を明示することが求められると考えられる。一方の山形は、東京と比較して、コミュニティ全体として流動性や多様性の要素が低く、そうした観点では、柿沼・上村(2003)の沖縄の地域と同様にそこに生活をする場合には、長期間お互いによく知った人間関係のなかでコミュニケーションがおこなわれる地域であることが窺える。結果として、行動の背景にある状況や理由もあらかじめよく知った上でコミュニケーションがおこなわれることが多く、その対処としては人間関係の対立的な側面を察しながらも、それに対する明確な言及や追求は避けて解決を図るというスタイルをとることが推測される。

東(1994)は、日米の道徳的判断の違いの解釈のなかで、人が運命的に結びついて共存している社会では、人が自由に離合集散できる社会と比べて、他者とのはっきりとした対立が社会的緊張をもたらすことになりやすいと述べている。そこでは、顕在的な対立によってコミュニティ全体が慢性的な争いに組み込まれることを避けるために、対立を避け、またそれが避けられない場合でも、それをできるだけ表立たせないようにする適応機制があることが指摘されている。同じ日本国内での比較とはいえ、人の出入りが多様な東京からみると、相対的流動性の低い山形のこの地域に生活する人は、人間関係の対処において否定的な側面の明言を避ける傾向があることが予測される。これが本研究の東京と山形の母子の発話スタイルに反映しているものと考えられる。すなわち、東京のスタイルは、絵を「そと」の状況として関係要素を一通り客観的に押さえた上で、情報に基づき分析し、複数の可能性の中からひとつを選択するというものであった。一方、山形の語り口調は、絵の内容を「うち」の一場面としてとらえ、過去に何が起きたかより、目の前で何が起きているか、そしてどうすれば良いかを重視する傾向がうかがえた。つまり、原因はどうであれ、目の前の状況を感情的にとらえ、どのように解決すべきかが優先されるのである。解決方法も具体的に折れた棒をもとに修理するといったことではなく、なぐさめるといった「感情レベル」での対処法をとっている。

沖縄の母子の語りのスタイルと異なるのは、「折れた棒」場面で「棒」に最初に言及するのはおもに子どもであった(柿沼ほか, 2004)のに対して、山形ではすべて母親によってこれに触られたことである。さらに、沖縄では泣いている原因を「内的要因」に帰属した母子はわずかであったのに対して、山形では言及頻度には「他者との関係」と差がほとんどないことも示された。以上のことから、国内地域の語りの直接的比較を通して流動性および多様性という要因の、語りのスタイルにおよぼす影響について、今後さらに検討されることが必要であろう。

語りの構成への母子それぞれの貢献についても、内容項目の提示に関する結果に地域差が示された。東京では母親によって複数の選択肢が提示されたり、母親の「なぜ、何」などの質問によって、子どもの情報の提示が促進されるという特徴がみられた。一方の山形では、場面の中心的題材や人物の感情、さいごに言及される解決といった枠組みとなる情報の多くが母親によって主導的に言及されることが多かった。東京と山形の子どもの意思決定に対する態度の研究(柿沼・宮下・東, 2002)によれば、

東京の子どもに対して山形では家庭での決定権は低い傾向であることが示された。このような家族関係のなかでの行動および主張の自由度や制約が、母子の語りスタイルにも反映していることは十分に考えられ、このような家庭内での意思決定にかかわる要因との関連をみていくことも、語りスタイルの地域差を理解するための手がかりとなり得ると考えられる。

母子の共同で構成される語りでは、それぞれの地域で有効なコミュニケーションのスタイルが選択されて使用されている。とくに本研究で焦点化した対立的な人間関係の場面をどう語るかという課題では、他者の行動に関する情報のうちのどの部分をもっとも優先的に読み、自己主張をどの程度するかという人間関係への対処のスク립トが、語りのなかで母親によってモデル提示される。そこでは、母親がそれぞれの地域に合った語りのスタイルが選択されて使用されており、子どもは母親と共同で語るという場面に参加することによって、必然的にそうしたスタイルを適応的に獲得していく過程が観察される。このような語りのスタイルや生活状況における適応パターンの獲得過程の検討が、文化差や地域差の意味や異文化間コミュニケーションを理解する上で有効と考えられる。

引用文献

- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育・発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.
- 東 洋. (2002). 社会的判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み. 平成11年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告者, 1-v.
- 柿沼美紀. (2001). 母親の語りに見られる地域差の検討. *母子研究*, 21, 56-61.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2001). 母親の語りに見られる地域差—東京と沖縄—. *発達研究*, 16, 116-124.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2003). 母親の語りに見られる地域差(3)—東京と沖縄の発話構成, 共同作業としての語りの比較—. *発達研究*, 17, 87-96.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進・金宇・黛雅子. (2004). 母子の語り場面に見られる文化差・地域差の検討—中国内モンゴル自治区・広州市・東京・沖縄の比較—. 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 504.
- 柿沼美紀・宮下孝広・東洋. (2002). 社会的意思決定に対する理解・態度の発達に関する国内比較研究. 平成11年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告者; 社会的判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み, 19-24.
- Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (1999). What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.
- Wertsch, J.V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge: Harvard University Press.

<謝 辞>

本研究の調査にご協力をいただいた保育所の職員の方々はじめ、保護者、園児の皆さんに御礼申し上げます。また、格別のご配慮をいただいた阿部医院の阿部寿美子先生に、心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は文部省科学研究費補助金交付研究 基盤研究(B)「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」(課題番号：14310062；研究者代表 東 洋)の一部として実施された。

